

『源氏物語』における「ありがたし」

泉屋 咲月

はじめに

『源氏物語』における「ありがたし」という表現について考えたい。元来、「ありがたし」とは存在しにくいという意味であり、場合によっては生きることが困難であるという意味にもなる。こうした存在の困難さは、「貴重である」とか「例がない」といったような意味にも転じる。つまり、「ありがたし」とは、単に存在の困難さを示すだけでなく、そこからさまざまな意味が派生しうる、多義的な表現なのである。

『源氏物語』で用いられる「ありがたし」に関しては、ある登場人物に用いられる場合について言及されることはあったが、物語全体における「ありがたし」に着目したものとしては、湯原美陽子氏の論稿が参看される。

湯原美陽子氏は、王朝物語における「容姿美」を検討するにあたり、『源氏物語』の「ありがたし」にも触れている。湯原氏は、「ありがたし」などによって表現される美質を「この世のもの

ならぬ」美を表す表現として分類した。そして、こうした「この世のものならぬ」美を表す表現は、『源氏物語』以前には「天界につながる美」を示す表現として用いられていたのに対し、『源氏物語』では「人間の美しさ」を表す表現として用いられるようになる述べた。

本稿では、湯原氏の論稿に導かれつつ、『源氏物語』における「ありがたし」一七八例⁵がどのように用いられているか、その特徴を明らかにしたい。

一 〈賛美〉表現としての「ありがたし」

『角川古語大辞典』⁶によれば、「動詞「あり」に補助形容詞「かたし」の接したものであり、意味は以下の六通りに分類される。

① 二語的な気持を残している用法。その事が存在するかどうか未確認な場合に用いる。存在しがたいことのみ。否定的意義を主とする。ほとんどない。めったにあり得ない。

② 既存の事の属性としていう。他にあり得ないと考えられることのみ。類のないさま。

③ 有ることがまれであつて、それゆえ価値のあることのみ。珍しく貴重であるさま。

④ 例がないと思われるほど、ありさまが立派であるさま。あろうことと思えぬほど立派である。

⑤ あり得ない事、または珍しい事で、それゆえ貴く、また感謝すべきだと思われることのみ。その事を、まれな感謝すべきものと感じ、その事をもたらした運命・神仏・冥助などに感謝する心情を主にしている。宗教的な随喜の感情を伴うときが多い。かたじけない。転じて、事の希少さにかかわらず、随喜すべき対象、または感謝すべき事態であると認めていう。

⑥ 主情的な表出として、喜悦または感謝の感情を示す。「しめた」というほどの軽い気持で慣用される。

これらのうち、感謝の意を含む⑤と⑥の用法は、『源氏物語』に用例を見出すことはできなかった。よつて、本稿では①～④の用法について検討することとする。

先に述べたように、「ありがたし」は、存在の困難さを表す語である。前掲の『角川古語大辞典』の分類に従えば、①がこの用法に該当する。①については後述するが、以下、②～④の用法について『源氏物語』における例を挙げつつ見ていきたい。

①の意味は実在することに対する否定的な意味合いが強いが、こうした存在することに対する困難さは「ほかにあり得ない」と

いう意味に転じる。②の用法がこれにあたり、たとえば、次のような用法である。

・女のいたくもの思ひたるさまなりしも、片はし心得そめたまひては、よろづ思しあはするに、いとよし。ありがたきものは、人の心にもあるかな、らうたげにおほどかなりとは見えながら、色めきたる方は添ひたる人ぞかし、この宮の御具にてはいとよきあはひなり、と思ひも譲りつべく、退く心地したまへど、……

(浮舟⑥―一七五)

浮舟と匂宮が通じていたことを悟つた薫による感懐である。「人の心」について、「ほかにあり得ない」ことをその属性として表している。

このような「ほかにあり得ない」という属性を表す用法は、珍しいがゆえに貴重であるという意味に転じ、対象に希少価値を付与する場合もある。③がそれに該当し、以下の場面が例として挙げられる。

・君は人ひとりの御ありさまを、心の中に思ひつづけたまふ。これに、足らず、また、さし過ぎたることなくものしたまひけるかなとありがたきにもいと胸ふたがる。

(桐壺①―九〇～九一)

雨夜の品定めを受け、源氏は藤壺を完全無欠の人物として想起

し、その希少性を「ありがたし」と評し、価値を見出すのである。
③の対象の希少性に価値を見出す用法は、転じて「貴い」、「立派である」といった賛美の意味を生じさせる。④がその用法に該当するが、たとえば、

・文など作りかはして、今日明日帰り去りなむとするに、かくありがたき人に対面したるよるこび、かへりては悲しかるべき心ばへを、おもしろく作りたるに、皇子もいとあはれる句を作りたまへるを、限りなうめでたてまつりて、いみじき贈物どもを捧げたまつる。

(桐壺①—四〇)

が挙げられる。ここでは、あらゆるすぐれた資質を備えた源氏が「ありがたし」と評されており、ここでの「ありがたし」は対象を賛美するための表現として機能していることに気づく。

①の用例は、比較的明確に特定できるが、②③④の用法は明確に区別することが難しい場合が多くある。まず挙げられるのは、ほかの語とともに用いられる場合である。たとえば、次のような例である。

・「年ごろのと絶えもうひうひしくなりにけれど、心にはいつとなく、ただ今の心地するならひになむ。すぎすぎしう、いとど憎まれむや」とてたまへれば、かたじけなくて持て行きて、「なほ聞こえたまへ。昔にはすこし思し退くことあらむと思ひたまふるに、同じやうなる御心のなつかしさなむい

とどありがたき。……

(関屋②—三六二)

ここでは、源氏の「同じやうなる御心のなつかしさ」が衛門佐(小君)によって「ありがたし」とされている。この「ありがたし」は、②の「ほかにあり得ない」属性を説明するための用法としても解釈できるが、衛門佐の心情を考慮すると、「同じやうなる御心のなつかしさ」に価値を見出すこともできるし、「貴い」、「立派である」ものとして捉えているという見方もできる。このように、②、③、④の意味の違いはそのどちらにも解釈できる場合があり、明確に区別することは難しい。

加えて、ほかの語とともに用いられる場合、その語との関係が判断し難い場合もある。

・ものきよげにいまめきて、そのものとも見ゆまじうしたてたる様体などのありがたうをかしげなるを、かうほめらるるなめり。

(少女③—六二—六三)

この場合の「ありがたう」は、「をかしげ」にかかっているものとして見た場合には②の「類がない」「他にあり得ない」の意味になり、「をかしげ」の程度を表すことになる。しかし、「をかしげ」と並列のものとして見た場合には、③や④の意味と解される。「ありがたし」は、ほかの語とともに用いられる場合においても、意味の断定が困難な表現なのである。

ところで、湯原氏^⑧は、『源氏物語』における「美的表現」をいくつかの分野に分け、「ありがたし」を「比較表現類の分野」に分類した。ここで、「ありがたし」以外の「比較表現類」のうち、たとえば「たぐひなし」の用法である。湯原氏が「美的表現」として分類した「たぐひなし」は、賛美を表す用法であるが、「たぐひなし」はほかの語を修飾するときは「比類なく」とか「ほかにはないほど」といった意味で用いられる。そうした意味が「美的表現」に転じる点において、「ありがたし」と類似しているといえよう。そこで着目したいのが、「たぐひなし」には、否定的な事象の「比類なき」を表す用例が認められるという点である。たとえば、以下に引用したような用法である。

• げにたぐひなき身のうさなりやと思しつづけたまふに、死ぬべくおぼえたまうて、……

(夕霧④―四〇八)

• さる世にたぐひなき悲しさと見たまへしことも、……

(宿木⑤―三九六)

「身のうさ」や「悲しみ」といった否定的な感情について、その程度が甚だしいことを表しているのである。賛美表現に転じるという点では「ありがたし」と共通しているが、こうした否定的な要素を強調する用法は「ありがたし」には認められなかった。

②、③、④の用法の間にはたしかな差異があるのだが、対象への賛美の意味が伴われるかどうかという若干の差異があるにすぎ

ず、対象を否定的に捉えることがないという点では共通している。また、実際に用例を分類しようとする時、②、③、④の用法のうちどのどれかに明確に分けられない場合が多いことは先に指摘したとおりである。よって、本稿では、②、③、④の用法を明確に区別することにはこだわらず、〈賛美〉に転じる場合も含め同列に扱うこととする。

最後に、①の用法、すなわち存在の困難さを表す用例について触れておく。この意味に関しては、②、③、④のような意味の曖昧さはなく、明確に特定できる。たとえば、次のような用法である。

• さる所にはかばかしき人しもありがたからむを思して、故院にさぶらひし宣旨のむすめ、宮内卿の宰相にて亡くなりし人の子なりしを、母なども亡せてかすかなる世に経けるが、はかなきさまにて子産みたりと聞こしめしつけたるを、知るとよりありて事のついでにまねびきこえる人召して、さるべきさまにのたまひ契る。

(濡標②―二八七)

『源氏物語』において、①の用例は全二二例（第一部七例、第二部十例、第三部五例）認められた。これらは〈賛美〉表現ではないので、別に扱う。このほか、〈賛美〉とは言えないものが三例認められた（これについては第五節で詳しく述べる）。よって、それらを除いた全一〇三例（第一部四六例、第二部二九例、第三部二八例）を〈賛美〉表現とする。

二 〈賛美〉の領域

「ありがたし」が物語全体を通して〈賛美〉表現として用いられる傾向があることは前述のとおりである。では、〈賛美〉表現としての「ありがたし」の実態とはどのようなものだろうか。そのことを考えるにあたり、まず、物語全体を通して、どのような語を対象としているのかを明らかにしたい。

対象語を特定する際には、解釈の違いによる曖昧さをなるべく少なくするため、対象が明確に示されているものに絞ることとした。また、限定的なものや解釈によって対象語が異なるものを除外した。以上の方法で特定した対象語について、〈心〉、〈外見〉、〈様子〉、〈身体〉の四種類に分類し、検討した。

物語第一部から第三部にかけて、〈賛美〉表現の用例において、これら四種類の割合の推移を見ておきたい。第一部、第二部、第三部における〈心〉、〈外見〉、〈様子〉、〈身体〉それぞれの用例数は以下の通りである。

部…二八例中五例

これら第一部から第三部にかけての〈身体〉を除く三種類を見ると、〈外見〉には、徐々に減っていく傾向があるといえようか。では、これらの「ありがたし」は、いったい誰の〈外見〉を対象としているのか。次に、第一部、第二部、第三部における〈外見〉を対象とする用例の内訳を示した。

- 第一部…源氏一例、藤壺一例、冷泉帝一例、五節舞姫（藤典侍）一例、紫の上一例
- 第二部…光源氏一例、夕霧一例
- 第三部…匂宮一例

これらのうち、第二部における夕霧の例を確認しておきたい。

• 女房などは、のぞきて見きこえて、「いとありがたくも見えたまふ容貌、用意かな。あなめでた」など集まりて聞こゆるを、老いしらへるは、「いで、さりととも、かの院のかばかりにおはせし御ありさまには、えなずらひきこえたまはざめり。いと目もあやにこそきよらにものしたまひしか」など、言ひしろふを聞こしめして、……

（若菜上④―二五）

- 〈心〉 第一部…四六例中一四例、第二部二九例中一一例、第三部二八例中九例
- 〈外見〉 第一部…四六例中五例、第二部二九例中二例、第三部二八例中一例
- 〈様子〉 第一部…四六例中六例、第二部二九例中六例、第三部二八例中五例
- 〈身体〉 第一部…四六例中一例、第二部…該当なし、第三

夕霧を覗き見る女房たちは、夕霧の「容貌」、「用意」を「ありがたし」とする。しかしその〈賛美〉は夕霧を対象としながらも、

結局光源氏の優位につながっていく。これは、ほかの人物を対象とした〈賛美〉の「ありがたし」には見られない特徴である。

このことと、第三部の用例が句宮を対象としていることを考え合わせ、あらためて第一部から第三部における〈外見〉に対する「ありがたし」の内訳を一覧してみる。すると、誰かの〈外見〉に対する〈賛美〉は、その数が減少していく中で、その対象の範囲は光源氏を中心に収斂されていくとはいえないか。

また、第一部から第三部に一貫して、〈心〉を対象とする用例の割合が高いことがわかる。つまり、「ありがたし」は、〈心〉すなわち人柄や思慮といった内面的性質を賛美するときに多く用いられているのである。もちろん、割合が高いというだけで、ほかの三種類も対象とした表現であることはいうまでもない。しかし、内面的性質を〈賛美〉する傾向があることは、『源氏物語』における「ありがたし」の特徴を考えるにあたり、留意すべき点であろう。

これらのことをふまえ、以下、第一部、第二部、第三部それぞれにどのような特徴が認められるか、見ていきたい。第二部における〈様子〉、第三部における〈身体〉が割合的に多いことについては、第二部、第三部それぞれの特徴を考える際に詳しく見ていく。

三 第一部における特徴

第一部の特徴を考えるにあたり、着目したいのは〈心〉を対象とする「ありがたし」である。先に述べたとおり、〈心〉を対象

とする用例の割合は、第一部から第三部にかけてほぼ一定しているといつてよい。これらは、誰の〈心〉を〈賛美〉するため用いられているのだろうか。

第一部における、〈心〉を対象とした「ありがたし」一四例のうち、夕顔(玉鬘③―一二八)と豊後介(玉鬘③―一三三)の〈心〉をそれぞれ対象とする計二例を除くと、残り一二例はすべて源氏の〈心〉を対象としているのである。また、第一部の〈賛美〉表現としての「ありがたし」四六例のうち、〈外見〉や〈様子〉のほか、さらに先に分けた四種類以外の対象語や対象語が明確に示されていない例も含めると、一九例が源氏を「ありがたし」と評するものであり、圧倒的に用例が多い。

〈賛美〉表現としての「ありがたし」の『源氏物語』全体に一貫した特徴として、〈心〉を対象とする傾向があることは先に述べた。そうした中で、源氏の〈心〉が中心的に〈賛美〉されるといふ側面は、第一部における「ありがたし」の特徴として捉えられる。

四 第二部における特徴

第一部の「ありがたし」による〈賛美〉は、源氏の〈心〉を中心的な対象としていることを先に指摘した。しかし、第二部に至ると、源氏の〈心〉を対象とした〈賛美〉の「ありがたし」は二例に減少する。では、第二部において〈心〉を「ありがたし」と〈賛美〉されるのは誰か。それは、夕霧と紫の上である。第二部における〈賛美〉の「ありがたし」のうち、〈心〉を対象とする

ものは十一例ある。二例が源氏、五例が夕霧、三例が紫の上、一例が明石入道の先祖の大臣の〈心〉をそれぞれ対象にしている。

まず、〈心〉を対象とした用例数をもっとも多い夕霧の場合を見る。最初の例は、前掲の若菜上巻で女房に「容貌」と「用意」を〈賛美〉される場面である。あらためて引用することはしないが、この場面においては〈外見〉（容貌）の場合と同様に夕霧の〈心〉（用意）が〈賛美〉されていながら、結局それは源氏賛美へとつながっていく。このことに注意しつつ、夕霧の〈心〉を〈賛美〉する例のうち、先に引用した一例を除く四例を確認する。

・御息所も、あはれにありがたき御心ばへにもあるかなと、
今はいよいよものさびしき御つれづれを、絶えず訪れたまふ
に慰めたまふことも多かり。

（夕霧④―三九五）

・人々は御気色もいとほしきを、嘆かしう見たてまつりつつ、
いかなる御事にかはあらむ、何ごとにつけてもありがたうあ
はれなる御心ざまはほど経ぬれど、かかる方に頼みきこえて
は見劣りやしたまはむと思ふもあやふく、など、睦まじうさ
ぶらふかぎりは、おのがどち思ひ乱る。

（夕霧④―四一五）

・今朝の御文のけしき、宮もほのかにのたまはせつるやうな
ど聞こえ、「年ごろ忍びわたりたまひける心の中を聞こえ知

らせむとばかりにやはべりけむ。ありがたう用意ありてなむ、
明かしもはてで出でたまひぬるを、人はいかに聞こえはべる
にか、律師とは思ひもよらで、忍びて人の聞こえけると思
ふ。

（夕霧④―四一九）

・大和守も、「ありがたき殿の御心おきて」など喜びかしこ
まりきこゆ。

（夕霧④―四四三）

これら夕霧の〈心〉を〈賛美〉する例は、すべて落葉宮への求婚をめぐつてのものであることがわかる。先に示したもう一例が、源氏〈賛美〉へと終着していくことをふまえると、夕霧への「ありがたし」は限定的な〈賛美〉であると言わざるをえない。

一方で、紫の上への「ありがたし」による〈賛美〉とはどのような様相を呈しているだろうか。第二部における夕霧に対する〈賛美〉の「ありがたし」は、先に挙げたように計六例（〈外見〉一例、〈心〉五例）であった。紫の上の場合、第二部における〈賛美〉の「ありがたし」の用例数は計七例であり、第二部においては最も多く、その内訳は〈心〉三例と〈様子〉五例であった。また、これらは若菜上巻から御法巻にかけて用いられており、落葉宮への求婚というひとつの事象をめぐって用例が集中する夕霧の場合とは異なる。

「ありがたし」が全体的に〈心〉を対象としがちな中で、第二部には〈様子〉に対する〈賛美〉の例が多いことをふまえると、

紫の上には特殊な用いられ方がなされていると考えられる。

第二部において〈様子〉を〈賛美〉する用例は六例認められたが、紫の上の〈様子〉を対象とした五例を除く一例は朱雀院に用いられる。以下に見ておきたい。

・年も暮れぬ。朱雀院には、御心地なほおこたるさまにもおはしまさねば、よろづあはたたくし思し立ちて、御裳着のこと思しいそぐさま、来し方行く先ありがたげなるまでいつくしくののしる。

(若菜④―四一―四二)

この「ありがたし」は、たしかに朱雀院の〈様子〉(「さま」)としてそれによる儀式の盛大さの程度の甚だしさを〈賛美〉している。一方で、紫の上の〈様子〉に用いられる場合はどうであろう。

・さし並び目離れず見たてまつりたまへる年ごろよりも、対の上の御ありさまぞなほありがたく、我ながらも生ほしたてけりと思す。

(若菜上④―七四)

ここでは、源氏によって紫の上の〈様子〉(「御ありさま」)があらためて確認され「ありがたし」と評されている。先の朱雀院の場合と比べると、〈賛美〉の性質がはるかに強いことがうかがえる。本文を逐一引用することはしれないが、紫の上へのほかの用

例にも同様のことがいえる。

第二部において、紫の上に「ありがたし」が用いられる時、紫の上を賞賛し「特徴づける」表現として機能していることは、倉田実氏によって早くに指摘されている¹⁶⁾。この点に加え、紫の上を対象とする用例が多く、それらにおいて〈賛美〉の性質が強く認められることもまた、第二部における「ありがたし」の特徴である。

さらに、第二部のもうひとつの特徴として挙げておきたいのが、存在の困難さを示す用法(前掲『角川古語大辞典』の分類における①である。以下「①の用法」と表記)の用例数が増えることである。『源氏物語』における「ありがたし」二二八例のうち、あらためて①の用例数を示すと、第一部五三例中七例、第二部三九例中十例、第三部三六例中五例の計二二例となり、第二部における①の用法の割合は圧倒的に高い。また、これら十例中九例が若菜上下巻に集中している。

第二部における紫の上〈賛美〉の側面から考えるとき、第二部における①の用例十例のうち、以下の三例には特に留意される。

・「(前略)みなおのおの得たる方ありて、わが後見に思ひ、まめまめしく選び思はむには、ありがたきわざになむ。ただまことに心の癖なくよきことは、この対の上をのみなむ、これをぞおいらかなる人と言ふべかりける、となむ思ひはべる。よしとて、また、あまりひたたけて頼もしげなきも、いと口惜しや」とばかりのたまふに、かたへの人や思ひやられぬかし。

(若菜上④—一三〇)

• かやうのことを、大将の君も、げにこそありがたき世なり
けれ、紫の御用意、景色の、こころの年経ぬれど、ともかく
も漏り出で、見え聞こえたるころなく、しづやかなるを本
として、さすがに心うつくしう、人をも消たず身をもやむこ
となく、心にくくもてなしそへたまへること、見し面影も
忘れがたくのみなむ思ひ出でられける。

(若菜上④—一三四)

• 「昔、世づかぬほどをあつかひ思ひしさま、その世には暇
もありがたくて、心のどかにとりわき教へきこゆることなど
もなく、近き世にも、何となく次々紛れつつ過ぐして、聞き
あつかはぬ御琴の音の出ではえしたりしも面目ありて、大将
のいたくかたぶき驚きたりし気色も、思ふやうにうれしくこ
そありしか」など聞こえたまふ。

(若菜下④—二〇四—二〇五)

第二部において、十例中三例という少ない割合で、①の用法が紫の上賛美(二重線を付した)に終着する文脈の中で用いられているのである。また、存在の困難さを示す用法とは言えないが、以下の一例においてもまた、紫の上を賛美する中で「ありがたし」が用いられている。

• 院、渡りたまひて、宮、女御の君などの御さまどもを、う

つくしうもおはするかなとさまさま見たてまつりたまへる御
目うつしには、年ごろ目馴れたまへる人の、おぼろけならん
がいとかく驚かるべきにもあらぬを、なほたぐひなくこそは
と見たまふ。ありがたきことなりかし。

(若菜上④—一八九)

このように、第二部における「ありがたし」は、紫の上について特徴的に用いられているのである。

五 第三部における特徴

本稿第二節で指摘したとおり、第三部における特徴としてまず挙げられるのは、〈身体〉に対して用いられる「ありがたし」である。用例数は五例であるが、第三部における〈賛美〉の「ありがたし」が全二八例であることをふまえると、割合としては多いだろう。第一部にも一例認められるが、第一部の〈賛美〉の「ありがたし」は全四六例であり、第三部における〈身体〉の割合は圧倒的である。

次に、第三部においては誰の〈身体〉が対象となっているかを見る。前五例の内訳は、大君一例(「匂ひ」、中の君二例(「御髪」、「髪のかかり髪ざし」)、薫二例(「移り香」、「御文」)である。以下に本文を引用した。

• 姫宮、もの思ふ時のわざと聞きし、うたた寝の御さまのいとらうたげにて、腕を枕にて寝たまへるに、御髪のたまりた

るほどなど、ありがたくうつくしげなるを見やりつつ、……

(総角⑤—三二〇)

・今はのこともするに、御髪をかきやるに、さとうち匂ひたる、ただありながらの匂ひになつかしうかうばしきも、ありがたう、何ごとにてこの人をすこしものめなりしと思ひさささむ、まことに世の中を思ひ棄てはつるしるべならば、恐ろしげにうきことの、悲しさもさめぬべきふしをだに見つけさせたまへと仏を念じたまへど、……

(総角⑤—三二九)

・寝くたれの御容貌いとめでたく見どころありて、入りたまへるに、臥したるもうたてあれば、すこし起き上がりておはするに、うち赤みたまへる顔のほひなど、今朝しも常よりことをかしげさまささりて見えたまふに、あいなく涙ぐまれて、しばしうちまもりきこえたまふを、恥づかしく思してうつぶしたまへる、髪のかかり髪ざしなど、なほいとありがたげなり。

(宿木⑤—四〇七)

・寄りゐたまへりつる真木柱も褥も、なごり匂へる移り香、言へばいとことさらめきたるまでありがたし。

(東屋⑥—五四〜五五)

・尼君、御文ひき解きて見せたてまつる。ありながらの御

手にて、紙の香など、例の、世づかぬまでしみたり。ほのかに見て、例の、ものめでのさし過ぎ人、いとありがたくをかしと思ふべし。

(夢浮橋⑥—三九一〜三九二)

さらに、第一部の〈身体〉に対する〈賛美〉の用例も参照しておく。

・御髪の乱れたる筋もなくはらとかがれる枕のほどありがたきまで見ゆれば、年ごろ何ごとを飽かぬことありて思ひつらむと、あやしきまでうちまもられたまふ。

(葵②—四五)

こうして〈身体〉に対する「ありがたし」を、たとえば同じ「髪」を対象としている中の君の用例二例と第一部の場合と比較してみると、第三部における「髪」の描写の方がより視覚的に感じられる。第一部の用例をみても、「乱れたる筋もなく」という描写から、たしかに美しい髪の様子が想起される。しかしながら、第三部における中の君の髪の方が、前の「腕を枕にて寝たまへるに」や「うち赤みたまへる顔のほひ」といった描写とあいまって、よりつぶさに観察されているように描かれているように思われる。第三部のほかの三例を見ても、視覚や嗅覚といった感覚によつて、対象の〈身体〉の一部を感じ取るさまが看取できる。〈心〉を〈賛美〉する用例が多い中で、この五例においては、目で見た匂いを嗅いだりすることで確かめられる美質が〈賛美〉されて

いるのである。

このように、〈身体〉の割合が増えることは、第三部の特徴のひとつである。〈外見〉の用例（匂宮一例）については先述したので、ここでは言及しない。〈様子〉を対象とした用例は計五例で、中の君、匂宮、八の宮、冷泉院、女一の宮に一例ずつ用いられていた。

次に、第三部の「ありがたし」の特徴として、〈心〉を対象としたものについて考える。第三部における〈賛美〉の「ありがたし」二八例のうち、〈心〉を対象としたものは全部で九例であるが、それらはすべて薫の〈心〉が対象となっている。このことをふまえると、第三部において〈様子〉を対象とするものがないことも、第三部の特徴として捉えられるのではないか。第二部の「ありがたし」が紫の上について特徴的に用いられていたのに対し、第三部では薫に特徴的に用いられているといえる。

最後に、第三部において〈賛美〉表現でない用法三例について考えたい。以下に本文を引用した。

（1）この君は、言はでうしと思はんこと、いと恥づかしげに心深きを、あいなく思ふこと添ひぬる人の上なめり、年ごろ見ず知りざりつる人の上なれど、心ばへ、容貌を見れば、え思ひはなつまじう、らうたく心苦しきに、世の中はありがたく、むつかしげなるものかな、わが身のありさまは、飽かぬこと多かる心地すれど、……

（東屋⑥—六九—七〇）

（2）「まことにつらしと思ひきこゆることもあらむは、いかと思さるべき。まろは、御ためにおろかなる人かは。人も、ありがたしなど咎むるまでこそあれ。人にはこよなう思ひおとしたまふべかめり。それもさべきにこそはとことわらるるを、隔てたまふ御心の深きなむ、いと心憂き」とのたまふにも、宿世のおろかならで尋ね寄りたるぞかしと思し出づるに涙ぐまれぬ。

（浮舟⑥—一三八）

（3）女のいたくもの思ひたるさまなりしも、片はし心得そめたまひては、よろづ思しあはするに、いとうし。ありがたきものは、人の心にもあるかな、らうたげにおほどかなりとは見えながら、色めきたる方は添ひたる人ぞかし、この宮の御具にてはいとよきあはひなり、と思ひも譲りつべく、退く心地したまへど、……

（浮舟⑥—一七五）

（1）では、匂宮に迫られた浮舟に同情する中の君の心内が語られ、女性の生きづらさが「世の中はありがたく」という表現で表されている。（2）では、中の君を厚遇することが世間から「ありがたし」として「咎め」られていることが、匂宮によって語られる。（3）は、第一節で述べたとおり、浮舟が匂宮と通じていたことを知った薫の述懐である。

第一部から第二部にかけては、①の存在の困難さを示すため、あるいは対象を〈賛美〉するための表現として「ありがたし」が

用いられていた。それが第三部では、「ほかにありえない」という属性を否定的に捉えていく用法が用いられるようになるのである。

おわりに

以上、『源氏物語』における「ありがたし」について、全体を通して〈賛美〉表現を中心に考察し、第二部においては存在の困難さを示す用法についての特徴も明らかにした。そして、第三部においては、薫について特徴的に用いられていること、「ありがたし」の「ほかにあり得ない」という性質が否定的な意味に転じていく例も認められることを指摘した。

第二部における紫の上や第三部における薫については、「ありがたし」を軸に、より深く検討する余地があるように思う。しかし、本稿では『源氏物語』全体を広く見渡し、「ありがたし」という表現に見られる特徴を明らかにすることを目的としたため、そうした問題に関しては今後の課題としたい。

注

(1) 外村南都子「ありがたし」〔国文学〕三六卷六号、一九九一年五月。

(2) たとえば、紫の上に用いられる「ありがたし」については、倉田実「紫の上と「人」表現―物語第二部における―」〔源氏物語の探究〕一五、風間書房、一九七六年)、北川真理「紫の上の理想性―形容語をめぐって―」〔学芸国語国文〕一三三号、一九七七年二月)、松木典子「紫の上をめぐる「ありがた

し」について―発病にいたるまでの階梯を理解するために―」〔平安朝文学研究〕三三三号、一九九六年一月)、中川正美「紫の上の孤愁―「個」の発見―」〔源氏物語のことばと人物〕青簡舎、二〇一三年。初出は、『兵庫女子短期大学研究集録』二四号(一九九〇年三月、原題同じ)などがある。

(3) 『王朝文学における容姿美の研究』(湯原美陽子(著)、有精堂出版、一九八八年)。

(4) 湯原美陽子「王朝文学に見られる容姿美の美的表現語彙」〔王朝文学における容姿美の研究〕有精堂出版、一九八八年)。

(5) 「ありがたし」だけでなく、「ありがたげ」なども用例として数えた。一二八例の内訳は、第一部五三例、第二部三九例、第三部三六例である。異同の認められる用例もあるが、紙数の都合上、それについては別稿にまとめることとし、本稿では新編日本古典文学全集(小学館)の本文をもとに認定した用例について検討した。

(6) 『角川古語大辞典』(中野幸彦・岡見正雄・板倉篤義(編)、角川書店、一九八二―一九三三年)。

(7) 本文は『新編日本古典文学全集』(小学館)による。その際の表記は「(巻名、巻数―頁数)」とした。

(8) 注4に同じ。

(9) 湯原氏は、「その語自体は美しさを意味していないが、限度や比較などによって表現する種類の用語」を「比較表現類の分野」とした。

(10) 『源氏物語』における「たぐひなし」という賛美表現について検討したものとしては、高橋早苗「源氏物語」の「たぐひなし」―紫のゆかりの女君たちをめぐる―」〔中古文学〕九〇号、二〇一一年一月)、拙稿「光源氏にとってのたぐひなし―紫の上へのまなざし―」〔立教大学日本文学〕一一四号、

二〇一五年七月)、「源氏物語」における「たぐひなし」―光源氏にとつての「たぐひなし」の独自性―(『立教大学日本文学論叢』一五号、二〇一五年九月)がある。

- (11) 湯原氏は、外見だけでなく内面や「才」を兼ね備えることが王朝文学における美の理想なのであり、単なる「外面上の美」ではなく内面や「才」の表象として捉えられる「人間美の総合」が「容姿美」であるとし、そうした「美」に対する意識を探究することを目的としている。しかし、本稿は「美意識」を探ることは目的とせず、あくまで「源氏物語」における「ありがたし」の位相を明らかにしようとするものである。よって、以下、先に述べた②③④の「ありがたし」の用法に見られる性質を「賛美」と表現する。

- (12) たとえば、次のような用例である。この場合、対象語は「御心」となる。

若君をかしづき思ひきこえたまへること限りなければ、あはれにありがたき御心と、いとどいたつききこえたまふことども、同じさまなり。(賢木②―一〇二)

- (13) 「ありがたし」一語についての考察であるため、湯原氏の対象語の分類とは異なる。本稿における対象語一覧は以下の通りである。なお、「御」の付くものも同列に数えた。

- ・〈心〉 心ばへ、用意、心、心おきて、心さま、心ざし、心ばせ、心用意、心寄せ
- ・〈外見〉 容貌、容貌人、様体、面影
- ・〈様子〉 ありさま、さま、もてなし、気色、けはひ
- ・〈身体〉 髪、匂ひ、移り香、御文

本稿では、全体像として感じ取るものを〈外見〉に分類した。「髪」は容姿の一部であるため、「身体」に分類した。「御文」は、人間の身体の一部とはいえないが、「御文」を対象とする

用例(第五節に掲出の夢浮橋巻の用例)では、筆跡(「御手」や匂い(「紙の香」)が、視覚や嗅覚によって薫の一部として捉えられていると見て、〈身体〉に分類した。

- (14) 入道の先祖の大臣の〈心〉(「心ざし」)を〈賛美〉する「ありがたし」(若菜④―二二八)は、源氏、夕霧、紫の上の〈心〉を〈賛美〉する例と比べると、第二部における「ありがたし」の特徴との直接的な関連はないと判断し、本稿で詳しく考察することはしない。

- (15) 〈賛美〉の対象語が明確に示されていないものも含め、第二部における紫の上への「ありがたし」全一例のうち、引用したものを除いた十例を指す。本文該当箇所は以下の通りである。若菜上④―一六三、若菜上④―一九〇、若菜上④―二二三、若菜上④―一三一、若菜下④―一九〇、若菜下④―二〇五、若菜下④―二二一、若菜下④―二二六、夕霧④―四七〇、御法④―五一六。

- (16) 前掲注2倉田論文。(いずみやさつき 大学院後期課程在學生)